



脳科学の知見活用進む

神経科学(脳科学)の知見を利用する「神経経済学」とよばれる研究分野への注目が集まっている。人間の決断や選択の多くは感情に関係した脳の領域が関係している。この点に注目して、人間の非合理的な経済行動を解明しようとする新しい学問領域である。

脳の古い部位が決断や選択下す

神経経済学は、比較的最近生まれた新しい分野の学問領域である。自然科学のなかの神経科学の知見を援用し、経済学の新しい方向を模索しようとするものだ。

神経経済学の道が開けたのは、機能的磁気共鳴画像装置(fMRI)など脳を傷つけずに脳の内部をスキャンできる機械が発達して、人間の脳の機能の解明が進んだからだ。人間行動における脳の機能、すなわちある行動とそれに対応した脳の働きを調べることで、両者の関係を分析することができるようになった。

神経科学によれば、人間が認知したり理性的に反応したりするといった高次の機能をつかさどるのは、「大脳皮質」と呼ばれる領域が作用する。一方、人間の決断や選択の多くは、こうした大脳皮質に占める割合が大きい「大脳辺縁系」の領域で、より原始的な役割がある。

伝統的経済学は人間は合理的に行動するとの前提でモデルを構築・分析してきた。こうした神経科学の枠組みを使えば、従来の経済学では説明がつかないような人間行動との関係の手掛かりが得られる可能性がある。

私が行った一つの実験で、私が行った一つの実験を紹介しよう。略奪ゲーム(Power to take)と呼ばれるこの実験は、ゲーム理論で有名な

感情の作用を重視 非合理的な行動、解明へ

感情の作用を重視 非合理的な行動、解明へ

最後通牒ゲーム(ultimatum game)を少し変形させたものだ。

答え出なかった問題に解決示唆

私が行ったゲームのルールは以下のようなものだ。まず二人のプレイヤーAとBが決まった金額を渡し、Aが「Bのお金のX%をほしい」と要求する。この「取り分」は0-100%の好きな値に決めてよい。次にBは自分のお金を好きなパーセンテージだけ「捨てたい」と宣言し、Aは残ったBのお金のうち最初に要求した「取り分」をもとらう。具体例でいえば、AとBに一万円ずつ渡

し、Bの六割をほしいとAが要求したとき、もしBが全く捨てなければAは六千円、Bが四千円受け取れるが、Bが四千円捨ててしまえば、Aは三千六百円、Bが二千四百円受け取ることになる。つまり、Bが四千円捨てることで、Bに残る額は千六百円減るが、Aの取り分も二千四百円減らさなければならない。頭で考えれば、Bは一切お金を捨てないと言言した方が得になる。しかし現実には、私が行った一つの実験で、私が行った一つの実験を紹介しよう。略奪ゲーム(Power to take)と呼ばれるこの実験は、ゲーム理論で有名な

この分析は、税制を考へる上で、完全に似ていないとはいえないまでも、参考にはなる。つまり、税率が高くなると、納税者側には課税する側を困らせてやりたいという感情的な反応が起きるといふことと関連するのではなからうか。困らせてやりたいと考える納税者が所得自体を引き下げるよう行動すれば、税収の縮小につながる。その結果、福祉サービスが過小になり、政府だけでなく納税者側も不利益を被る。私たちはこれを乗り越えたい。私たちがこれを乗り越えたい。私たちがこれを乗り越えたい。

フランス・ヴァン・ヴィンデン
アムステルダム大学教授



社会的な影響? 幸福に影響?

伝統的な経済学の立場からは、「神経経済学は成果を過大に評価している」「経済学とは仮説を分析して予測する学問であり、予測の精度こそが重要で、プロセスはさほど重要ではない」といった批判がある。また議論は多いが、今ここでいえるのは、最終的には経済学者の新たな分析道具の一つになるだろうというところだ。経済学他の手法に取って代わることはないが、補うものにはなるだろう。

フランス・ヴァン・ヴィンデン
アムステルダム大学教授

行動経済学 進化と応用

>>中

「大脳皮質」の必要機能をもつ部位の進化とともに、大脳皮質は生物の進化とともに脳の中に占める割合が大きい。つまり、理性を「コントロール」する役割がある。

この分析は、税制を考へる上で、完全に似ていないとはいえないまでも、参考にはなる。つまり、税率が高くなると、納税者側には課税する側を困らせてやりたいという感情的な反応が起きるといふことと関連するのではなからうか。困らせてやりたいと考える納税者が所得自体を引き下げるよう行動すれば、税収の縮小につながる。その結果、福祉サービスが過小になり、政府だけでなく納税者側も不利益を被る。私たちはこれを乗り越えたい。私たちがこれを乗り越えたい。私たちがこれを乗り越えたい。

現在私が取り組んでいる最も重要な研究は、社会的な相互作用の結果として、かかわりのあった人の幸福をよ意味でも悪い意味でも気にかけるようになるのではないかと思われる。そして、幸福に

フランス・ヴァン・ヴィンデン
アムステルダム大学教授